

越後平野における生態系ネットワーク推進協議会 自然環境活用部会(第1回)
議事要旨

■日時：令和4年12月16日(金)13:00～15:15

■場所：北陸地方整備局会議室(web会議併用)

■規約の確認

承認

■部会長、副部会長の選任

規約に基づき事務局より推薦。部会長に関島委員、副部会長に藤田委員を推薦し、承認

■議事

(1) 自然環境活用部会の進め方について

部会長

- ・ 生態系ネットワークの形成によって、社会面・経済面において様々な効果をもたらし、地域の資源を活用して持続性につなげていくため、皆様のご協力をいただきたい。

(2) 越後平野生態系ネットワーク全体構想及び行動計画について

(質疑無し)

(3) 前回協議会を踏まえた方策案とモデルプロジェクトについて

事務局

(欠席した委員のご意見について報告)

- ・ モニターツアーの対象者が誰であるかは意識した方がよい。例えば、県内在住で、この地域の魅力を知らない方が対象なのか、県外からの旅行客等が対象なのかによって内容が変わる。
- ・ 活動を自走させることを目指し、他の団体を巻き込んだり、担い手を発掘することが重要である。特に若い人が仕事として関わると良い。
- ・ 月岡温泉との連携について、持続可能な観光に興味を持っている宿泊施設との連携により、宿泊と福島潟とのツアーを自然環境や持続可能性に興味がある層に対して届けられるのではないかと。
- ・ 誰をターゲットにするかを明確にすることが重要。福島潟については、まずは地域の皆様に来てもらって、福島潟という場を知ってもらう必要がある。
- ・ 特に、子供に知ってもらう取組を行うことで、親子が揃って学んでいくことができるような取組にしてはどうか。

部会長

- ・ 北海道阿寒国立公園では、絶景を堪能できるおしゃれなカフェがつくられており、利用者が増えている。景色を見ながら、温かいお茶を楽しむことは一つの資源であり、地域の人から遠方の観光客まで、地域の魅力を知る非常に重要な切り口になる。これらを活かしていく取組は有効。
- ・ そこには法による制約の壁があるが、例えば特区に指定する等、環境負荷に配慮しつつ利活用できる仕組みづくりが今後重要となる。

委員

- ・ モニーツアーに参加し、自分の知らなかった福島潟の魅力を知ることができ、非常に有意義な時間だった。
- ・ 観光の動機は大きく2つあり、「新しい体験をしたい」と「日常から脱却したい」である。「日常生活から脱却」するためには、自然をゆっくり観察する時間をとるとするのは非常に大事な観点。阿寒国立公園のように野生生物や自然の観察を行うことで欲求を満たすことができる場所は、国内にはそれほど多くないと思う。そのような点が福島潟の魅力として、他との差別化が実現できる可能性を持っていると感じた。
- ・ オープンカフェ等は大変良いアイデアだと思う。利用客が次に発展的に雁晴れ舎に立ち寄り、自然や水鳥を近くで見たいという欲求を持つ設計があると良い。
- ・ ターゲットの欲求とコンテンツとの合致という点について、調査が必要。ターゲット層ごとに、関心を示すようなコンテンツを考えられると良い。例えば長期に滞在する訪日外国人は何を目的として長期間訪れているのか等、ターゲット層ごとに、関心を示すようなコンテンツを考えられると良いと思う。

オブザーバー

- ・ 「日常からの脱却」という観点で考えていくと、地元住民は田んぼにいるハクチョウは日常だが、月岡温泉に向かう観光バスが一時停車をしてハクチョウの写真を撮る時間を作ることもあるなど、観光客で関心を示してくれる方もいる。福島潟の魅力というのは、普段接していない方を対象とする方がより訴求性は高いと考えている。
- ・ 菱風荘の方も話していたが、人によって、何もないというのをつまらないと感じるか、それとも居心地が良いと感じるかで分かれるが、福島潟では後者の人を対象に、関心を深めてもらう方向で考えたい。結果として、当初は対象が絞られるかもしれないが、取組を進めていくことで、全体としての魅力の向上にも繋がっていくだろうと、今回のモデルプロジェクトを通じて自分も感じたところである。

部会長

- ・ 観光客のグルーピングとして、メジャーなグループとマイナーなグループと分けられるが、最初の切り口としては、福島潟に魅力を感じた人を対象に月岡温泉と紐づけて、モニーツアーを組んでいくというのは良いと思う。
- ・ それと並行して、新潟を訪れる観光客のバックグラウンドを科学的視点で解析・類型化し、観光客が何を求めて新潟を訪れるのか、その関心に合致する観光資源や宿泊施設等を、グループ分けから紐づけてカテゴライズし、戦略的に進めていく必要があると考える。藤田委員のところでもそのような社会科学的な解析が進められるのであれば、協力をお願いしたい。

委員

- ・ 一般の観光客をグルーピングする際には、観光客がどのような事を求めているかという情報が必要。
- ・ ヒシの実の固さの感触や近くで水鳥が飛翔する姿を見られる体験や潟舟など、福島潟の魅力には非常に可能性を感じている。これらの活用の際には、魅力や観光資源を価値に変換するべく、整理が必要。

委員

- ・ 潟来亭を始めとした周辺施設は、大変ロケーションが素晴らしいものと感じており、県の観光パンフレットの表紙にも使われたことがある。
- ・ 県外観光客をターゲットとした場合、観光消費やKPIをどのようにお考えか。自走するための、民間事業者が入り込める素材づくり、KPIのすり合わせが必要。

オブザーバー

- ・ 新潟市北区観光協会としては、現在のところは交流人口を増やそうという点に力を入れているが、観光消費がされないという可能性もあるため、今後ビュー福島潟や菱風荘等の周辺施設、地域の飲食店で、オリジナリティのあるメニューを用意するなど、観光消費を増やすための仕掛けをしていきたい。
- ・ 周辺施設は指定管理者ということもあり、自主事業が難しいという課題もある。また、観光によって収益が得られるという実感がないと、関係者とも方向性を合わせづらい。

部会長

- ・ モデル事業を通じて、期間限定で試行的に検証を行い、採算が合うと分かったら、次にどのように展開していくか考えると良いと思う。

オブザーバー

- ・ ラグーンブリュワリーさんが事業としてカフェを営んでいる。連携して、繰り返しきてもらえるような取っ掛かりを作りたいと考えている

部会長

- ・ 県外の観光客、特にアウトドアに関心のある方を対象に、例えば大手アウトドアメーカーと連携するという案もこれまでに出来ている。大手アウトドアメーカーにも関心を示していただいているため、そのような切り口から県外観光客を引き込めると良いと思う。
- ・ 新潟市が取得した、ラムサール条約の湿地自治体認証は、海外の方が関心を示すきっかけとなりとても重要だと思っている。その際、インバウンドをどのように迎え入れ、楽しんでいただくか、魅力づくりを本活用部会場で発掘していきたい。

委員

- ・ 社会実験を実施した時、訪れた人はどこで情報を入手し、どのような人が訪れたのか、行動の特性がとれると良い。駐車場で販促活動を行ったらどの程度の収益となるか実験を行い、どのような人が何をかうのか、例えば子ども向けの物を設置する等、特性に合わせて検証していくと良いだろう。

部会長

- ・ 取組のステップアップを図る上で、常に社会的科学的に検証し、フィードバックしていくことが重要。ぜひ社会的科学的な解析やプログラム化に向けたアイデア出し等を進めていただきたい。それら全てを、藤田委員が担うのは難しいため、都度、関連する有識者に関わっていただく必要があるかもしれない。
- ・ 広報面においても、村山委員によるSDGs番組の活用や大学での教育面、中村委員には新潟日報社における広報協力等、皆様と協力し合いながら進めていけると良い。

委員

- ・ 例えば単に食事するだけでなく自分たちでお米を作って収穫して食べる、というような付加価値をつけるUX(ユーザーエクスペリエンス)デザインの思考が必要と感じた。自然があり、自然を土台とした文化がある、さらに自然を土台とした文化の中で我々は様々な恩恵を受け、楽しみを感じているというようなストーリーづくり、伝え方の工夫、一般の方へのメッセージを届けられると良い。

部会長

- ・ 今後地域の資源をより理解するためにも、潟来亭等の場所で、福島潟のプロダクトを実際に体験する、ヒシ、マコモやコイなどの魅力を味わうような場を部会で設けてはどうか。

(4) 環境学習について

オブザーバー

- ・ 村上市立荒川中学校で、SDGsの視点で「持続可能な社会に向けて、あしもの課題に気づき、課題解決のためにできる方策を考え、多様な他者と共に共同・共創する」ことを目的とした総合学習を行った。
- ・ 1年生は探求テーマごとに地域の事業者等を訪問し、お互いの気づきや変容のきっかけを発信すべく、レポート作成とミニプレゼン大会を実施した。自主学習ノートで生徒自らが率先してテーマ内容を勉強するなど、興味を持って取り組んでもらうきっかけとなった。
- ・ 3年生の「あらかわチャレンジ」では、「持続可能な地域づくりや社会課題解決に向けて多様な他者と共同・共創し課題解決プロジェクトに取り組む」ことを目的に、地域の行政、商工会、事業者・団体・個人と連携したプロジェクトを実施した。中学生は自然が大好きであり、プロジェクトの収益を学生本人たちの要望に従い地域の環境保全活動に取り組む団体に寄付するなど、意識が高まった。
- ・ 「生態系ネットワーク」の視点での課題としては、授業時数が限られるため、探求学習に多くの時間を割けないというため、①環境・社会・経済の繋がりや、生態系ネットワークの有機的な結びつきの理解が十分ではない、②3年間の学習が教科・領域を横断しながらスパイラルに積み重なっていくようなカリキュラムマネジメントが必要、③学校外で生き物や自然に触れるような体験学習の機会が少ない、の大きく3点が挙げられる。
- ・ 今後の連携案としては、「小学校・中学校・高校の総合的な学習の時間でフィールドワーク」、「環境分野に関心のある生徒が集い、ゼミのように学び合える場づくり」、「中学3年生の地域貢献プロジェクトの環境分野チームの伴走」等が実施できると良い。

委員

- ・ 佐渡島に関係する6名の先生に講師をしてもらい、県内小学生・中学生を対象に佐渡に1泊2日の環境学習の取組を実施した。子どもたちは非常に熱心で、沢山メモを取りながら話を聞き、フィールドワークで素直で率直な表情が感じられるなど、子どもたちは自然学習や体験に飢えているという印象を持った。
- ・ ぜひまた実施してほしいとの要望も多くいただき、費用面の課題はあるものの、来年度も実施する予定。

部会長

- ・ 子どもたちは非常に興味があるのに提供する場がない、というのはまさにその通りで、学年をまたいで子どもたちが集い、大学のゼミのように学び合い、意見交換ができる場があると良い。興味を持って深い知識を持つ児童・生徒が集まって、影響し合い伝播しながら知識をさらに深めて、それを大学等が補助するような地域のゼミの場が作られれば、自然と保護者も紐づいて関わるようになり、地域の魅力が発展することも期待できる。

委員

- ・ 中学校でそのような意識を高める取組は非常に素晴らしい。子どもたちの取組に対する火が消えず大学でも学んでもらえるような仕組みが必要。

委員

- ・ 小学校、中学校は義務教育の中で地域に触れ合う機会が作られることが多いが、高校生になると切れてしまう。小学校から大学までのネットワークを構築し、地域のゼミのように意見交換をする場をつくるというのは非常に良い。荒川中学校のような地域の学校が繋がる、プラットフォームの仕組みづくりを進めていくことが重要。

部会長

- ・ 他の生態系ネットワークとも連携し、県や地方をまたいだネットワークの構築や、「ラムサール条約の湿地自治体認証」を通じた海外との連携など、生物に限らず様々な分野でのネットワークの拡大を進められると良い。
- ・ ネットワークを活用し、子どもたちに魅力的な派遣授業を行い、向学心を養生し、刺激していくことをモデル事業として行うのも良いと思う。